

訳語によって起る新約聖書 用語の屈折について (5)

加藤 邦雄

引用文献略記

本文中に引用する文献をそのまま数多く繰り返すことをさけるために、符号のようにその書名を略記したい。

1. Syr……The New Testament in Syriac (Peshitta).
2. Jenn……Jenning's Lexicon to the Syriac New Testament (Peshitta).
3. Brock……Karl Brockelmann, Lexicon Syriacum.
4. Levy……Levy, Chaldäisches Wörterbuch.
5. Talm-Midr……Levy, Wörterbuch über die Talmudim und Midraschim.
6. Dalm……Dalman, Aramäisch-Neuhebräisches Handwörterbuch zu Targum, Talmud, und Midrasch.
7. Gesenius……Gesenius, Hebräisches und Aramäisches Handwörterbuch.
8. Köhler……Köhler-Baumgartner, Lexicon in Veteris Testamenti Libros.
9. Lisowsky……Lisowsky, Konkordanz zum Hebräischen Alten Testament.
10. LXX……The Septuagint.
11. Hatch……Hatch-Redpath, Concordance to the Septuagint.
12. Liddell……Liddell-Scott, Greek-English Dictionary.
13. ThWNT……Kittel, Theologisches Wörterbuch zum Neuen Testament.
14. Bauer……Bauer, Griechisch-Deutsches Wörterbuch zu den Schriften des Neuen Testaments und der übrigen urchristlichen Literatur.
15. Thayer……Thayer, Greek-English Lexicon of the New Testament.
16. Cremer……Cremer, Biblico-Theological Lexicon of New Testament Greek.

17. Vulg……Biblia Sacra (Vulgata).
18. Concord……Concordantiarum Universae Scripturae Sacrae Thesaurus.
19. Lewis……Lewis, A Latin Dictionary.
20. Krebs……Krebs, Antibarbarus der Lateinischen Sprache.
21. Kluge……Kluge, Etymologisches Wörterbuch.
22. Paul-Betz……Paul-Betz, Deutsches Wörterbuch.
23. Littré……Emile Littré, Dictionnaire de la Langue Française.
24. Dauzat……Dauzat-Dubois-Mitterand, Nouveau Dictionnaire Etymologique.
25. Oxford……The Shorter Oxford English Dictionary.
26. OxfEty……The Oxford Dictionary of English Etymology.
27. Klein……Ernst Klein, A Comprehensive Etymological Dictionary of the English Language.
28. Webster……Webster's Third New International Dictionary.
29. Luther……Luthers-bibel.
30. AV……The Authorized Version.
31. RSV……The Revised Standard Version.
32. NEB……The New English Bible.
33. TEV……To-day's English Version.
34. Jérusalem……La Sainte Bible traduite en française sous la direction de L'École Biblique de Jérusalem.
35. Crampon……La Sainte Bible du Chanoine Crampon (Nouvel édition 1960).
36. Menge……Die Heilige Schrift übersetzt von Menge.
37. Zürcher……Zürcher-bibel.
38. 口語……口語訳聖書(日本聖書協会)
- 39' 広辞苑……新村出編 広辞苑(第二版)

A G A P Ē

一般に、愛なる語をギリシャ語で表現すると、*agapē* と *philia* と *erōs* との三つであるといわれる。いうまでもなく、それ以外にも、これらの語に近接する意味を持ついくつかのギリシャ語があるが、そのように範囲を拡大しないで、今あげた三つのギリシャ語を Hatch を手掛りとして LXX の中に求めると次のようになる。

LXX の中に、*agapē* は20回近く使用されていてその使用箇所は次の通りである。但し、ついでながら、Vulg におけるラテン訳も参考までに記入して置く。

サム後	1:26	<i>amabilis</i>
	13:15	<i>amor</i>
伝道	9:1	<i>amor</i>
	9:6	<i>amor</i>
雅歌	2:4	<i>charitas</i>
	2:5	<i>amor</i>
	2:7	<i>diligere</i>
	3:5	<i>diligere</i>
	3:10	<i>charitas</i>
	5:8	<i>amor</i>
	7:6	<i>diligere</i>
	8:4	<i>diligere</i>
	8:6	<i>dilectio</i>
	8:7	<i>charitas</i>
	8:7	<i>dilectio</i>
エレミ	2:2	<i>charitas</i>

なお、Apocrypha は口語訳にはないが、LXX にも Vulg にもその中の相当数のものが収められていることは衆知の通りである。次の二つの書の中に *agapē* が使用されている。

知恵書	3:9	<i>dilectio</i>
	6:18	<i>dilectio</i>
	6:18	<i>dilectio</i>
シラク	48:11	<i>amicitia</i>

いうまでもなく、Apocrypha はヒブル語原典の中には見出されない。ヒブル語原典が LXX として訳された範囲内において、agapē はいずれもヒブル語の ahabah の訳であって、ahabah 以外のヒブル語からの訳は一つもない。

LXX において philia は次のようなヒブル語の訳である。

ahab (箴言 5:19)

ahabah (箴言 5:19. 10:12. 15:17. 17:9. 27:5)

dod (箴言7:18) ⁽¹⁾

rea (箴言19:7) ⁽²⁾

それ以外に、Apocrypha に属する部分では次のような個所にかなり多く philia が使用されている。

知恵書 7:14. 8:18.

シラク 6:17. 9:8. 22:20. 25:1. 27:18.

マカバイオス一書 8:1. 8:12. 8:17. 10:20. 10:23. 10:26. 10:54.
12:1. 12:8. 12:10. 12:16. 14:18. 14:22. 14:23. 15:7.

マカバイオス二書 4:11 6:22

マカバイオス四書 2:11. 2:11. 8:6.

ヒブル語原典と LXX との関連についていうならば、dod と rea の使用回数はそれぞれ1回であるのに比して、ahabah は5回で、その動詞の形の aheb が1回ある。そうすると philia もまた大体においてヒブル語の ahabah の訳であると理解して大きな誤りはないであろう。

後にも述べるように、新約聖書がギリシャ語で書かれていても、その中に erōs なる語は1回も出て来ない。それに比較すると LXX には、僅か2回ではあるが erōs が用いられている。すなわち、箴言7:18と24:51 (30:16) とである。なお7:18はヒブル語 ohab すなわち aheb の変化した形の語の訳であり、24:51にはヒブル語 raḥam の訳である。raḥam は箴言24:51では「女の愛」をあらわすが、その語は元来創世記49:25. イザヤ46:3. エゼキエル20:26. などでは、女が子を宿す場所としての腹を意味し、そこから女の愛情が出て来ると古代人は考えた⁽³⁾。

以上のように、LXX に関する限り、agapē と philia と erōs と、三つの名詞にいささか触れたが、agapē はすべて ahabah の訳であり、philia は二つの例外を別とすれば大体において ahabah の訳であり、erōs は agapē お

よび *philia* とはかなり相違した意味であるので、これは他の二つから区別したい。そうすると、LXX において *agape* と *philia* とは近接した関係にあって、両者は本来 *ahabah* なる一つの語の訳であったと理解して大過はないようである。

- [註] (1) 箴言 7:18にある *dod* は LXX で *philia* なる語でかなり精神的に、訳されているが、この個所では *erotisch* な愛として描かれている。NE B はこの語をここでは *pleasure* と訳した。
- (2) 箴言 19:7の *rea* は元来「同胞」の意味であるが、ここでは「友」の意味に用いられている。
- (3) *raḥam* (または *reḥem*) は本来は母の胎を意味する。それが特に複数形で用いられる場合「内臓」の意味からさらに転じて「あわれみ」を意味し、神の「あわれみ」をあらわす場合 (イザヤ 63:15. セカリヤ 1:16. 詩 79:8. 119:77) にも多く用いられた。それ故に *raḥam* 即 *erotisch* な愛と断言することはできない。このような表現は、セム語に多く見られる例である。Levy, Brockel, Gesenius Köhler 等を参照。

LXX において、*agapē* なる語の動詞である *agapan* の用法を Hatch を手掛りとして調べると次のようになる。

1) *ahab* 171回

創世 22:2. 24:67. 25:28. 25:28. 29:18. 29:20. 29:30. 29:32.
34:3. 37:3. 44:20.
出エジ 20:6. 21:5.
レビ 19:18. 19:34.
申命 4:37. 5:10. 6:5. 7:8. 7:9. 7:13. 10:12. 10:15. 10:18.
10:9. 11:1. 11:13. 11:22. 13:3. 15:16. 19:9. 21:15. 21:15.
21:16. 23:5. 30:6. 30:16.
ヨシュ 22:5. 23:11.
士師 5:31. 14:16. 16:4. 16:15.
ルツ 4:51
サム上 1:5. 16:21. 18:1. 18:3. 18:16. 18:20. 18:22. 18:28.
20:17. 20:17
サム下 1:23. 12:24. 13:1. 13:4. 13:15. 13:21. 19:6. 19:6.
王上 3:3. 5:1. 10:9. 11:2.
代下 2:11. 9:8. 11:21. 20:7.
ネヘ 1:5. 13:26.

訳語によって起る新約聖書用語の屈折について(5)

ヨブ 19:19

詩篇 4:2. 5:11. 10(11):6. 10(11):8. 25(26):8. 30(31):23.
32(33):5. 33(34):12. 36(37):28. 89(40):6. 44(45):7. 46(47):4.
51(52):3. 51(52):4. 68(69):36. 69(70):42. 77(78):68. 86(87):2.
96(97):10. 98(99):4. 108(109):17. 114(115):1. 118(119):47. 118
(119):48. 118(119):97. 118(119):113. 118(119):119. 118(119):127.
118(119):132. 118(119):140. 118(119):159. 118(119):163. 118
(119):165. 118(119):167. 121(122):6. 144(145):20. 145(146):9.
箴言 3:12. 8:17. 8:21. 8:36. 9:8. 12:1. 12:1. 13:24. 15:9
15:12. 16:13. 19:8. 20:13. 21:17 22:11

伝道 5:9. 5:9. 9:9.

雅歌 1:3. 1:4. 1:7. 3:1. 3:2. 3:3. 3:4.

ホセ 3:1. 3:1. 4:18. 9:1. 9:10. 9:15. 10:11. 11:1. 12:7.
14:5

アモ 4:5. 5:11.

ミカ 6:8.

ゼカ 8:17. 8:19.

マラ 1:2. 1:2. 1:2. 2:11.

イザ 1:23. 41:8. 43:4. 48:4. 56:6. 57:9. 61:8. 66:10.

エレ 2:25. 5:31. 8:2. 14:10. 38(39):3.

哀歌 1:2

エゼ 16:37.

ダニ 9:4. 9:4.

なお、LXX において agapan と訳された語の中には、ahab から名詞の形
に変わった ahabah としての次の個所がある。

1) ahabah 12回

サム上 20:17. 20:17.

詩篇 108(109):4.

ホセ 3:1. 9:15.

イザ 6:9.

ミカ 6:8.

創世 29:20.

訳語によって起る新約聖書用語の屈折について(5)

申命 7 : 8.

王上 10 : 9.

代下 2 : 11. 9 : 8.

2) raḥam 5回

詩篇 18 : 1. 箴言 28 : 13. ホセ2 : 23. ゼカ 10 : 6. イザ 60 : 10.

3) yadid 4回

申命 33 : 12. イザ 5 : 1. 5 : 1. エレ 11 : 15.

4) yeshurun 4回

申命 32 : 15. 33 : 5. 33 : 26. イザ 44 : 2.

5) bō 2回

サム 下7 : 18. 代上 17 : 16.

6) ḥaphetz 2回

イザ 6 : 9. 詩篇 51 : 6.

7) zakar 1回

雅歌 1 : 4.

8) hata 1回

ホセ 8 : 11.

9) yēdiduth 1回

エレ 12 : 7.

10) yaḥed 1回

箴言 4 : 3.

11) masos 1回

エレ 30(49) : 25.

12) suth 1回

代下 18 : 2.

13) yasah 1回

詩 119 : 166.

14) patha 1回

詩篇 78 : 36.

15) qanah 1回

箴 16 : 3(15 : 32).

16) ratzah 1回

訳語によって起る新約聖書用語の屈折について⑤

代上 29 : 17.

17) shamar 1 回

箴言 28 : 4.

18) shaa 1 回

詩篇 94 : 19.

19) shaashuyim 1 回

イザ 5 : 7.

以上のように、agapan と訳され、212 回乃至 213 回使用されたヒブル語の中、90パーセント以上の使用回数を持つ語は aheb (171回) およびその名詞形の ahabah (21回) とである。

aheb が、どのようなギリシヤ語に訳されているかを Hatch を手掛りとして調べて見ると次のようなことが判明する。

1) agapan	171回
2) philein, philos	21回
3) erasthai, erastes	16回
4) その他	5回
計	213回

philein は10回使用され、次の個所にある。

創世 27 : 4. 27 : 9. 27 : 14. 37 : 4.

ホセ 3 : 1.

箴言 8 : 17. 21 : 17. 29 : 3.

伝道 3 : 8.

イザ 56 : 10.

philos は 8 回であって次の通りである。

エス 5 : 10. 5 : 14. 6 : 13.

詩篇 38(39) : 11. 87(88) : 18.

箴言 14 : 20. 27 : 6.

エレ 20 : 4. 20 : 6.

erasthai は 2 回で

エス 2 : 17.

箴言 4 : 6.

erastēs は14回で

ホセ 2:5(7). 2:7(9). 2:10(12). 2:12(14). 2:13(15).

エレ 22:20. 22:22.

哀歌 1:19.

エゼ 16:33. 16:36. 16:37. 23:5. 23:9. 23:22.

その他の語については使用回数が少ないのでここでは省略したい。

以上の如くで判明した通り、*ahēb* の213回の中、*agapan* と訳された箇所は171回であるので、そのパーセントは84という数字になる。*philein*, *philos* の21回は必ずしも小さい数ではなく、また、*erasthai*, *erastēs* の16回もけっして無視できない回数であろう。それで、*ahēb* は大体において *agapan* と訳されてよい、という判断は84パーセントしか妥当しない。

LXX において、*agapan*, *philein*, *erasthai* などと *ahēb* が訳されているが、*agapan* と *philein* と *erasthai* とがどこまで正確に区別されて訳されたか大いに疑問である。すなわち、LXX において *agapan*⁽¹⁾ と訳されている箇所の中にも、*philein*⁽²⁾ や *erasthai*⁽³⁾ と、その内容から見て、ほとんど区別できないものが多々ある。

- [註] (1) *agapan* これの少し変った形でならば、すでに Homer にも用いられ、to welcome, entertain の意味であり、人と人との間の関係において、一般には、to be fond of, to love dearly の意味であった。人と物との関係においても、同様に、to be well pleased, to be contented at あるいは with a thing の意味であった。Liddell 参照。
- (2) *philein* 人と人との間においては、to treat affectionately あるいは kindly, to welcome, to be friend, の意味であり、kiss をするように、愛情を表現することも *philein* といわれた。したがって、*agapan* と *philein* とは、幾分その用法が相違しても、明確に区別されるようなものではなかった。
- (3) *erasthai* この語の基本的な意味は、to long for, desire passionately である。なお、Klein によると、*agapan*, *philein*, *erasthai* のいずれも、その究極的に最も古い語源がどこに由来したのか、未だ正確には判明していないことになっている。

ヒブル語の *ahēb* の語源について、筆者は正確な知識を未だ持ち合せていない。それに近接したアラビア語があるかの如くであるが、学問的に正確な知識を未だ持っていない。もし他のセム語の中に例を求めれば、アラム語にそれに類似した *ḥabab* があって、Levy はそれがヒブル語の *ahab* に由来すると説明をする。*ḥabab* はシリア語の *ḥab* と関連を持っている。Brockel 209 頁以下参照。アラム語の *ḥabab* は元来 *brennen* するの意味で、特に愛

のために *brennen* するの意味である。

旧約聖書における *ahab* の用法を見ると、その語源が何であるにせよ、男と女との間の愛、友と友との間の愛、人に対する神の愛、神に対する人の愛、事物に対する人の愛などに用いられている。それ故に、広い意味での愛であって、*love* とか *lieben* とかというような現代語に訳しても、大体よくその意味をあらわすであろう。むしろ、LXX におけるように *agapan*, *philein*, *erasthai* などと訳したり、あるいは Vulg におけるように *amare* や *diligere* などと訳すと、その中のどの語に最も近い意味であろうか、という混乱が反って生じるのかも知れぬ。

ヒブル語において、動詞の *ahab* を名詞にすれば、いうまでもなく、*ahabah* であって、その語についてはある程度のことをすでに述べた。

ahabah は40回ほど、旧約聖書に用いられているが、それが LXX においては次のように訳された。

<i>agapē</i> ⁽¹⁾	16回
<i>agapēsis</i> ⁽²⁾	7回
<i>agapān</i> ⁽³⁾	12回
<i>philia</i> ⁽⁴⁾	5回

1) *agapē* は次の個所にある。

サム後 1:26? . 13:15.

伝道 9:1. 6:6.

雅歌 2:4. 2:5. 2:7. 3:5. 3:10. 5:8. 7:6. 8:4. 8:6. 8:7. 8:7.

エレ 2:2.

なお、異本によると、箴言 7:18. 10:12. 15:17. 詩篇 33:5. エゼ 16:18. 雅歌 7:12. にも *agape* を用いる個所がないこともない。

また、Apocrypha の中に収められている知恵書 3:9. 6:18. 6:18 およびシラク 48:11 にも *agape* なる語がある。それらを加えると *agape* の回数はさらに10回ほど増加する。

2) *agapēsis*

サム後 1:26. 1:26.

詩篇 108(109):5.

ホセ 11:4.

ゼカ 3 : 17.

エレ 2 : 33 . . 33(31) : 3.

3) agapan

サム上 20 : 17. 20 : 17.

詩篇 108(109) : 4.

ホセ 2 : 23? . 3 : 1. 9 : 15.

イザ 63 : 9.

ミカ 6 : 8.

創世 29 : 20.

申命 7 : 8.

王上 10 : 9.

代下 2 : 11. 9 : 8.

4) philia

箴言 5 : 19. 10 : 12. 15 : 17. 17 : 9. 27 : 5.

なお、これ以外に、ある異本によると、ahabah が euphrosynē⁽⁵⁾ と訳された個所がわずか1回ある(ゼバ3 : 17?) ようであるが、その読み方には疑義があるらしいので、また、その回数が1回なので、ここでは割愛したい。

- [註] (1) agapē この名詞は agapan なる動詞に由来し、brotherly love, charity の意味であるとされる。
 (2) agapēsis これも agapan に由来し、the feeling of love, affection、と訳される。
 (3) agapan これについてはすでに述べた。
 (4) philia はすでに述べたように、philein に由来し、love, friendship、と訳され、ラテン語の amicitia に近い。
 (5) euphrosynē は cheerfulness, mirth, merriment と訳される。

ahabah のギリシヤ語訳として、agapē と agapēsis と、agapan との使用回数を合計すると16+7+12=35となり、philia は前述のように5回用いられている。それ故に agapan 系統の語35回に対して philia は5回、すなわち、7対1である。これを、aheb なる動詞が LXX においてどのようなギリシヤ語に訳されたか、と比較すると、aheb の回数に比して ahabah の回数が非常に少ないこともあるが、ahabah は agapan 系統の語と philia との二つに用いられている。

ところが、Vulg において、ahabah がどのようなラテン語に訳されたか

訳語によって起る新約聖書用語の屈折について(5)

を調べて見ると次のようになる。

diligere ⁽¹⁾	13回
amor ⁽²⁾	9回
charitas ⁽³⁾	8回
dilectio ⁽⁴⁾	8回
amare ⁽⁵⁾	1回
amicitia ⁽⁶⁾	1回

その使用個所を挙げれば次のようになる。

1) diligere

申命 7 : 8.

サム上 18 : 3. 20 : 17. 20 : 17.

王上 10 : 9.

代下 2 : 10. 9 : 8.

詩篇 109 : 4.

雅歌 7 : 7. 8 : 4.

ホセ 3 : 1. 9 : 15.

ミカ 6 : 8.

2) amor

創世 29 : 20.

サム下 1 : 26. 13 : 15.

箴言 5 : 19. 27 : 5.

伝道 9 : 1. 9 : 6.

雅歌 2 : 5. 5 : 8.

3) charitas

箴言 10 : 12. 15 : 17.

雅歌 2 : 4. 3 : 10. 8 : 7.

エレ 31 : 3. 2 : 2.

ホセ 11 : 4.

4) dilectio

雅歌 2 : 7. 3 : 5. 8 : 6. 8 : 7.

詩篇 108 : 5.

イザ 63 : 9.

エレ 2:33.

ゼバ 3:17.

5) amare

サム下 1:26.

6) amicitia

箴言 17:9.

- [註] (1) diligere. これは agapan によく似ている内容を示し, to single out, value, esteem, prize, love などを第一義とする。
- (2) amor. 後に述べる動詞の amare に由来し, love, affection, strong friendly feeling と訳される。
- (3) charitas. caritas と書かれる。carus に由来し, dearness, costliness, high price の意味から転じて, regard, esteem, affection, love の意味になる。後に, 中世では独自の内容をもった神学用語になったが, そのことは後に詳述する。
- (4) dilectio. 動詞の diligere より, 変化させた名詞形。
- (5) amare. これから amor なる名詞ができた。amare の語源は古くは, サンスクリット語あたりまでさかのぼることのできる。to love, be fond of, find pleasure in と訳される。英語の aunt, amateur, amiable, amity, enemy, など, 同じ語源に由来する。Klein 参照。
- (6) amicitia. amicus に由来し, friendship の意味である。

Vulg における ahabah のラテン訳は, これを三つに分けることができる。すなわち diligere (13回) と dilectio (8回), と amor (9回) と amare (1回) と amicitia (1回), それから charitas (8回) である。diligere の系統は21回, amor の系統は11回, charitas は8回である。これを LXX における ahabah の訳語に比較すると, その訳語の種類が僅かしか増加しておらず, したがって, 同じ ahabah であっても, 三つの系統に訳されると, 次第に, わずかずつではあるが, dilectio と amor と charitas とに ahabah が分けられて解釈される可能性が幾分生じて来た感がする。勿論, 旧約の部分では Vulg といえどもそのような三つの使い方を判然と区別したわけではないが, ただ, その傾向が次第に見え始めたように感じられる。

ただ, 次のようなことは断言できよう。ヒブル語原典において「愛」を意味する ahabah は一つの語で, 一切の愛を表現したが, LXX になると agapē と philia とに二分され, さらに Vulg になると, dilectio と amor と charitas との三つに分けられたのであるから, ahabah は LXX, Vulg と時代がたつに従ってその訳語が分化したのであると。

訳語によって起る新約聖書用語の屈折について(5)

Luther における ahabah の訳語を見ると、次のようになっている。

1) Liebe 20回
サム後 1 : 26. 1 : 26. 13 : 15.
詩篇 109 : 5.
箴言 5 : 19. 10 : 12. 15 : 17. 27 : 5.
伝道 9 : 1.
雅歌 2 : 4. 2 : 5. 2 : 8. 7 : 7. 8 : 4. 8 : 6. 8 : 7. 8 : 7.
ホセ 9 : 15. 11 : 4.
ミカ 6 : 8.

2) lieben 12回
創世 29 : 20.
申命 7 : 8.
サム上 18 : 3. 20 : 17. 20 : 17.
代下 2 : 10. 9 : 8.
詩篇 109 : 4.
伝道 9 : 6.
イザ 63 : 9.
エレ 2 : 2. 31 : 3.

3) gefallen 2回
雅歌 2 : 7. 3 : 5.

4) liebhaft 1回
王上 10 : 9.

5) lieblich 1回
雅歌 3 : 10.

6) Freundschaft 1回
箴言 17 : 9.

7) gnädig 1回
エレ 2 : 33.

8) buhlen 1回
ホセ 3 : 1.

9) vergeben 1回
ゼバ 3 : 17.

以上、40回出て来る *ahabah* の中で、*Liebe* の系統に属する *lieben*, *lieblich*, *liebhaft* を合計すると、34回になり、全体に占める割合は85パーセントである。*Liebe* 系統の語以外に5種類の語がそれぞれ1回乃至2回ずつでも、とにかく、使用されている。それは、*Vulg* の訳語に比較して、*Luther* になると訳語の種類がさらに増加したことになる。ただし、*Vulg* において、*ahabah* がいくつかのラテン語に幾分仕分けられた感がないでもない印象を少し与えているのに比較すると、*Luther* は *ahabah* をその本来の広い意味に受け取って *Liebe* なる一般的なドイツ語を採用した。

Liebe, *lieben* は、古くは、インド、ヨーロッパ語の語源にまでさかのぼり得る長い歴史を持ち、同じドイツ語である *erlauben*, *glauben*, *Lob* などとも遠い親類にあたる。いずれも、元来は、喜び、希望をもった感情をいいあらわした。ラテン語の *libido* ともどこかで関連する語である。*Kluge*, *Paul-Betz* を参照。要するに *Luther* が採用した *Liebe*, *lieben* なるドイツ語は、何の変哲もない、民衆のことばであって、特別な意味に狭く限定されて用いられるようなものではなかった。その意味で、*Luther* は、*Vulg* を越えて、また、*LXX* のギリシヤ語をも乗り越えて、かなり *ahabah* に近い粗糲な用語を回復させたといえよう。

AV において、*ahabah* は次のような語に訳された。

1) *love* 33回

創世 29:20.

サム下 1:26. 1:26. 13:15.

詩篇 109:4. 109:5.

箴言 5:19. 10:12. 15:17. 17:9. 27:5.

伝道 9:1. 9:6. 2:4. 2:5. 2:7. 3:5. 3:10. 5:8. 7:6. 8:4.

8:6. 8:7. 8:7.

イザ 63:9.

エレ 2:2. 2:33. 31:3.

ホセ 3:1. 9:5. 11:4.

ミカ 6:8.

ゼバ 8:17

2) *loved* 7回

申命 7:8.

サム 上18:3. 20:17. 20:17.

王上 10:9.

代下 2:10. 9:8.

以上によって誰にでも判るように、AV は love と loved とに訳した。要するに、名詞と動詞との差はあっても、AV は ahabah を love の一語に完全に統一した。Luther において、ahabah は85パーセントまでしか Liebe に統一されなかったのに、AV はそれを love の一語で完全に統一した。後に述べるように、新約聖書における問題は別として、少なくとも旧約聖書における ahabah は AV によってほとんど完全にその原型に回復されたといつてよからう。

love なる語が Liebe と近い関係にあることには誰でも気付くが、インド・ヨーロッパ語の一つであるサンスクリットの lubbh は to desire の意味であつて、それに由来するラテン語の lubet, libet, libido, libido もその系統の意味をもつ。love が Love と大文字で書かれるとき、Eros の擬人化として用いられる。しかし、love は神の愛を表現する場合にも用いられるので、もし love を最も包括的に定義しようとすれば、Oxford にしたがつて次のようになるであろう。That state of feeling with regard to a person which arises from recognition of attractive qualities, from sympathy, or from natural ties, and manifests in warm affection and attachment.

新約聖書における agapē を論ずる場合、その語の動詞の形である agapan の用法を検討せねばならぬ。筆者は、そのために、ネストレ版の用法、Vulg のそれを比較し、さらに、一方ではセム語系統に属するシリア語訳である Peshitta を並べながら、他方ではヨーロッパ語としての Luther と AV の訳を比較することにした。なお、参考までに、Vulg における訳語との関連から Jérusalem, Crampon その他、現代フランス語訳をいくつか比較して見た。しかし、問題がいよいよ複雑になるので、まことに残念ながら動詞の形としての agapan とその訳語の用法について、ここでは割愛することにして、直ちに名詞の形である agapē の問題に移りたい。

新約聖書において、agapē は150回ほど用いられているが、次のごとくである。

1) 共観福音書 2回
マタイ 24:15.

訳語によって起る新約聖書用語の屈折について(5)

ルカ 11:42

2) ヨハネ福音書 7回

5:42. 13:35. 15:9. 15:10. 15:10. 15:13. 17:26.

3) パウロ書簡 75回

ロマ 5:5. 5:8. 8:35. 8:39. 12:9. 13:10. 13:10. 14:15. 15:30.

コリ I 4:21. 8:1. 13:1. 13:2. 13:3. 13:4. 13:4. 13:4. 13:8.
13:13. 13:13. 14:1. 16:14. 16:24.

コリ II 2:4. 2:8. 5:14. 6:6. 8:7. 8:8. 8:24. 13:11. 13:13.

ガラ 5:6. 5:13. 5:22.

エペ 1:4. 1:15. 2:4. 3:17. 3:19. 4:2. 4:15. 4:16. 5:2. 6:23.

ピリ 1:9. 1:16. 2:1. 2:2.

コロ 1:4. 1:8. 1:13. 2:2. 3:14.

テサ I 1:3. 3:6. 3:12. 5:8. 5:13.

テサ II 1:3. 2:10. 3:5.

テモ I 1:5. 1:14. 2:1. 4:12. 6:11.

テモ II 1:7. 1:13. 2:22. 3:10.

テト 2:2.

ビレ 5. 7. 9.

4) その他の書簡および黙示録 32回

ヘブ 6:10. 10:24.

ペテ I 4:8. 5:14.

ペテ II 1:7. (2:13)

ヨハ I 2:5. 2:5. 3:1. 3:16. 3:17. 4:7. 4:8. 4:9. 4:10. 4:
12.4:16. 4:16. 4:16. 4:17. 4:18. 4:18. 4:18. 5:3.

ヨハ II 3. 6.

ヨハ III 6.

ユダ 2. 12. 21.

黙示 2:4. 2:19.

以上の中で、ペテロ第二の手紙2:13は原典によって、agape となっているものと、そうでないものがある。もし、ネストレ版によるならば、ここに agapē はないことになる。したがって新約聖書において agapē は115回用いられたことになる。

訳語によって起る新約聖書用語の屈折について(5)

ギリシャ語原典から、Vulg へと目を転じ、さらに Luther や、AV、その他のヨーロッパ語訳を見るのが自然であろうが、それでは、セム語系統の訳に触れる機会が全くなくなるので、Peshitta を少し見たい。

筆者の読み方は必ずしも正確でないかも知れないし、また手許に Peshitta の Concordance を備へていないわけではないので、数字に幾分の誤差はあるかも知れぬが、agapē のシリア語訳は次のようである。

ḥuba	111回
reḥmta	1回
ruḥa	1回

シリア語について少し説明せねばならぬが、ḥuba は ḥabeb に由来する。前にすでに述べたようにそれときわめて近似した語がアラム語にもある。ヒブル語の aheb と多分どこかで連っているのであろう。reḥmta はアラム語の raḥemetha やヒブル語の raḥam と近い関係にある。raḥam についてはすでに説明した。ruḥa はアラム語の ruḥa と同じ意味で、reḥmta と同一系統の語である。要するに、Peshitta においては、2回の例外を除けば、agapē をヒブル語の ahabah の縁で理解している、と理解してよからう。

紀元400年頃、ラテン語訳が Vulg なる形で完成されたが、agapē や philia をどのようなラテン語に訳すべきであるかについて、当時すでに問題が意識されていたので、Vulg の訳された頃に生存していた Augustinus はその大著 De Civitate Dei の中で、そのことに言及している。すなわち、同書14卷7章の中に次のような句がある。 Hoc propterea commemorandum putavi, qui nonnulli arbitrantur aliud esse dilectionem sive caritatem, aliud amorem. Dicunt enim dilectionem accipiendam esse in bono, amorem in malo. これによって判明するように、当時ある人々は、dilectio あるいは caritas を amor から区別して、前者を高度の愛とし、後者を余り良くない意味、すなわち低い意味での愛であると、主張していた。Augustinus 自身はそのような区別の仕方を dilectio, caritas, amor というような言葉そのものによって使いわけることはしなかったのであるが。

Vulg の新約聖書の部分において agapē は次のように訳された。

charitas	90回
dilectio	24回
Sanctus	1回

訳語によって起る新約聖書用語の屈折について(5)

以上の中で sanctus とわずか1回訳された個所はペテロ1書5:14であるが、その原典の文章の読み方に問題があるので、この個所は問題として取り上げなくてよい。そうすると、Vulg の新約聖書において、agapē はその78パーセントまで charitas と訳されその21パーセントが dilectio と訳されたのであるから、両者の比は大体7対1である。したがって、Vulg は新約の部分で agape を完全に近い比率で charitas に統一はしなかったとはいえ、とにかく、7対1で charitas を多く用いたことになる。これを、同じ Vulg でも旧約の部分における ahabah のラテン訳と比較するとかなり相違する。すなわち、すでに述べたように、40回の ahabah 中、diligere 13回、dilectio 8回、に対して charitas は8回、amor は9回である。さらに LXX において ahabah が agapē と訳された16の個所について Vulg を見ると次のようになっている。charitas 4回、diligere または dilectio 6回、amor あるいは amare 6回。ここでも、charitas が圧倒的に多く用いられているわけではない。すると Vulg は、その新約の部分において、agapē を特に多く charitas と訳したことになる。

Vulg が成立して以後、その新約の部分において charitas と訳された個所は次のごとくであるが、中世の charitas についての教義理解と相まって、後世に長くその影響を与え、後に述べるように、カトリクの影響の強いフランス語訳にはいまでもなく、プロテスタント信仰の強いイギリスで出来た AV にさえもその影響が見られるようになった。

1) charitas 90回

マタイ 24:12.

ルカ 11:42.

ロマ 5:5. 5:8. 8:35. 8:39. 14:15. 15:30.

コリ I 4:21. 8:1. 13:1. 13:2. 13:3. 13:4. 13:4. 13:8. 13:13.14:1. 16:14. 16:24.

コリ II 2:4. 2:8. 5:14. 6:6. 8:7. 8:8. 8:24. 13:13.

ガラ 5:6. 5:13. 5:22.

エペ 1:4. 2:4. 3:17. 3:19. 4:2. 4:15. 4:16. 6:23.

ピリ 1:9. 1:16. 2:1. 2:2.

コロ 2:2. 3:14.

テサ I 1:3. 3:6. 3:12. 5:8. 5:13.

訳語によって起る新約聖書用語の屈折について(5)

テサII 1:3. 2:10. 3:5.

テモI 1:5. 4:12. 6:11.

テモII 2:22

ピレ 5. 7. 9.

ヘブ 10:24.

ペテI 4:8. 4:8.

ペテII 1:7.

ヨハI 2:5. 2:15. 3:1. 3:16. 3:17. 4:7. 4:8. 4:9. 4:10. 4:12. 4:16. 4:16. 4:16. 4:17. 4:18. 4:18. 4:18. 5:3.

ヨハII 3. 6.

ヨハIII 6.

ユダ 2.

黙示 2:4. 2:19.

2) dilectio 24回

ヨハネ 5:42. 13:35. 15:9. 15:10. 15:10. 15:13. 17:24.

ロマ 12:9. 13:10. 13:10

コリII 13:11.

エペ 1:15. 5:2.

コロ 1:4. 1:8. 1:13.

テモI 1:14. 2:15.

テモII 1:7. 1:13. 3:10.

テトス 2:2.

ヘブ 6:10

ユダ 21.

Luther において、新約聖書における agape は一つの例外もなく、完全に統一されて die Liebe の一語に訳された。旧約聖書において ahabah は必ずしも die Liebe に統一されないで、他にいくつかの訳語が用いられていることはすでに述べた。

しかるに、Luther の訳し方を当然知っているはずの AV 訳者はどうしたことか、agapē の訳として次の語を用いた。

love 87回

charity 29回

charitably 1回

dear 1回

1) love その個所をここでは明記しない。

2) charity 29回

コリ I 8:1. 13:1. 13:2. 13:3. 13:4. 13:4. 13:4. 13:8. 13:13. 13:13. 14:1. 16:14.

コロ 3:14

テサ I 3:6.

テサ II 1:3.

テモ I 1:5. 1:15 (Vulg では dilectio) 4:12.

テモ II 2:22.

テトス 2:2.

ペテ I 4:8. 4:8. 5:14 (Vulg では Sanctus)

ペテ II 1:7.

ヨハ III 6.

ユダ 12 (テキストに疑問がある)

黙示 2:19

3) charitably 1回

ロマ 14:15.

4) dear 1回

コロ 1:13 (Vulg では dilectio)

AV の中に、charity なる語が30回ほどもあることは、Vulg の影響としか考えられない。そこで、charity なる英語が、AV の訳された頃、どのような意味であったか、そしてまた今はその charity はどのような意味であるかを少し検討して見たい。

AV より以前に訳された Tyndale, Cranmer, The Genevan Version, The Rhems Version, Wicliffe などの訳の中にも、agapē の訳として charity が用いられている。17世紀において、love といえは、それはちょうど今日日本でラヴと発音した時と同様に、大体においてギリシャ語の erōs に似た感じを与えた。それで Thomas Browne や Jeremy Taylor なども、charity の語を好んで用いた。

そこで、代表的な英語の辞典を開けて見ると、charity とは、第一義的に

は *charitas* に由来し、フランス語を経て、英語に入って来た *christian love* であって、次のような三つの意味に区別される。その第一は、被造物としては持ち得ないが、神によって与えられてのみ、神を愛する愛である。その第二は、人間に対する神の愛である。第三に、神の愛の故に他の人を愛する人間の愛である。これは大体において Webster によって解釈した理解である。日本で出版された英和辞典でも、研究社の大英和辞典では、*charity* の第一義を「神に対する愛をもって同胞に対するキリスト教的愛」すなわち「同胞愛」「人間愛」とする。それ故に、現代英語の背景には中世以来の *charitas* の思想があつて、それは本来神そのものが持っている神の *virtue* であつて、それが人間の中に注入されて、人間が神を愛し、人を愛する愛を持つようになる、というのであつたが、今日は中世以来の背景が次第に後退して、単に人に対する同胞愛としてのみ理解され易くなった。ことに、社会福祉の世界で、チャリティという時には、狭い特定の意味のみに用いられて、古い型の慈善を意味するようである。

現代におけるフランス語聖書の中でもカトリク系のものを見ると、AV よりも多く *charité* の語が用いられているようである。

たとえば、*Jérusalem* を見ると *agapē* は次のように訳されている。

- | | |
|---------------------|-----|
| 1) <i>charité</i> | 60回 |
| 2) <i>amour</i> | 49回 |
| 3) <i>dilection</i> | 1回 |
| 4) <i>affection</i> | 1回 |
| 5) <i>aime</i> | 3回 |

- 1) *charité*

ロマ 12 : 9. 13 : 10. 13 : 10. 14 : 15. 15 : 30.

コリ I 4 : 21. 8 : 1. 13 : 1. 13 : 2. 13 : 3. 13 : 4. 13 : 4. 13 : 4. 13 : 8. 13 : 13. 13 : 13. 14 : 1. 16 : 14.

コリ II 2 : 8. 6 : 6. 8 : 7. 8 : 8. 8 : 24.

ガラ 5 : 6. 5 : 16. 5 : 22.

エペ 1 : 15. 4 : 2. 4 : 15. 4 : 16. 6 : 23.

ピリ 1 : 9. 1 : 16.

コロ 1 : 4. 2 : 14.

テサ I 1 : 3. 3 : 6. 5 : 8. 5 : 13.

訳語によって起る新約聖書用語の屈折について(5)

テモ I 1:5. 1:14. 2:15. 4:12. 6:11.

テモ II 2:22. 3:10.

テト 2:2.

ピレ 5. 7. 9.

ヘブ 6:10. 10:24.

ペテ I 4:8. 4:8. 5:14.

ペテ II 1:7.

ヨハ III 6.

ユダ 21.

黙示 2:4. 2:19.

2) amour

マタ 24:12.

ルカ 11:42.

ヨハ 5:42. 13:35. 15:9. 15:10. 15:10. 15:13. 17:26.

ロマ 5:5. 8:35. 8:39.

コリ II 5:14. 13:11. 13:13.

エペ 1:4. 2:4. 3:17. 3:19. 5:2.

ピリ 2:1. 2:2.

コロ 2:2.

テサ I 3:12.

テサ II 1:3. 2:10. 3:5.

テモ II 1:7. 1:13.

ヨハ I 2:5. 2:15. 3:1. 3:16. 3:17. 4:7. 4:8. 4:9. 4:10. 4:12. 4:16. 4:16. 4:16. 4:17. 4:18. 4:18. 4:18. 5:3.

ヨハ II 6.

ユダ 2.

3) dilection

コロ 1:8.

4) affection

コリ II 2:4.

5) aime

コロ 1:13.

訳語によって起る新約聖書用語の屈折について(5)

ロマ 5:8.

ユリ I 16:24.

また、同じくカトリク系のCrampon 訳を見ると、agapē は次のように訳されている。

- 1) charité 69回
- 2) amour 43回
- 3) affection 1回
- 4) aime 2回

1) charité

マタ 24:12.

ロマ 12:9. 13:10. 13:10. 14:15. 15:30.

コリ I 8:1. 13:1. 13:2. 13:3. 13:4. 13:4. 13:4. 13:8. 13:13.13:13. 14:1. 16:14.

コリ II 2:8. 6:6. 8:7. 8:8. 8:24.

ガラ 5:6. 5:13. 5:22.

エペ 1:4. 1:15. 3:17. 3:19. 4:2. 4:15. 4:16. 5:2. 6:23.

ピリ 1:9. 1:16. 2:1. 2:2.

コロ 1:4. 1:8. 2:2. 3:14.

テサ I 1:3. 3:6. 3:12. 5:8. 5:13.

テサ II 1:3.

テモ I 1:5. 1:14. 2:15. 4:12. 6:11.

テモ II 1:7. 1:13. 2:22. 3:10.

テト 2:2.

ピレ 5. 7. 9.

2) amour

ルカ 11:42.

ヨハ 5:42. 13:35. 15:9. 15:10. 15:10. 15:13. 17:26.

ロマ 5:5. 5:8. 8:35. 8:39.

コリ I 4:21.

コリ II 5:14. 13:11. 13:13.

エペ 2:4.

テサ II 2:10. 3:5.

3) affection

コリII 2:4.

4) aime

コリI 16:24.

コロ 1:13.

Vulg において agapē は90回 charitas と訳されたが、Crampon はそれを69回まで charité と訳し、Jérusalem は60回まで同じ語に訳した。AV が charity と訳した語は25回である。なお、フランス訳であってもフランスのプロテスタント教会が訳した Version Synodale において charité は次のように11回しか用いられていない。

コリII 2:8. 8:8. 8:24.

テサI 5:8.

テモI 2:15.

テモII 2:22.

テト 2:2.

ピレ 5. 7.

ヘブ 10:24.

ヨハIII 6.

(なおこの Version Synodale において、amour は99回ほど用いられているが、その箇所はここに明記しないで、省略する)

現代のフランス語において、charité が何を意味するのか。その語が本来、教会ラテン語の charitas に由来することにおいてフランスで出版されたフランス語辞典はいずれも共通の理解をもっているが、その第一義を同胞へのキリスト教的愛と理解するものと、神の徳として理解するものとある。Littréなどは、かなりの程度まで、その語の中に神学的要因と共にキリスト教道徳のそれとを認めて解釈している。

charité と agapē をフランスでは、程度の差はあっても、訳さざるを得ないところに、中世以来 Vulg を通してフランスの社会に定着したカトリク信仰とカトリク倫理とがあるように思われる。

そこで charitas は、agapē の訳として完全に正確であったか、どうか、という問題が起きる。これについて、Nygren の著 Agape and Eros によると、その著者は charitas なる思想のそもそも由来する根源として August-

tinus の *charitas* 理解を取り上げる。“*Caritas is not simply another name for agape. …… The conception of love in Augustine or Dante is not a simple interpretation of agape, but a transformation of it. Mediaeval caritas is a complex phenomenon, containing elements both of agape and of eros.*” (ibid. p. 55). そして、Nygren は Augustinus 以来カトリック教会が *charitas* の中に含めていた *erōs* 的の愛——それは単に感覚的な愛あるいは肉欲的な愛ということのみではなくて、人間性の中から出て来た欲求としての神への愛をも十分に含めるが——を完全に清算して、*agapē* を完全に神の恵みおよびそれへの応答として理解したのは、改革者ルターであった、と主張する。

Nygren が、ルター神学を神学として、愛を *agape* と *eros* とに二分して、問題を整理したことは、神学論としては大きな貢献であった。しかし、かれが *agapē* と *eros* とに愛を二分したからとしても、かれの定義したような意味に限定して、聖書が *agape* を用いているのではない。特定の神学的な内容をもって主張されている *agapē* 論がそのまま、聖書の解釈の中に押し込まれて来ると、聖書そのものの本来の意味は全くわからなくなってしまふ。教義学者の主張が強ければ強いほど、「聖書にきく」という原則がおかされて、「神学にきく」ことに置きかえられる。Nygren の *agapē* 論がひろく読まれた時、そのような誤りが一部に起きたらしい。LXX における *agape* は *ahabah* の訳であって、*ahabah* の内容は最も広義に受けとらるべきものであって、あらゆる種類の愛がそれに含まれている。新約聖書における *agape* はかなり論点がしばられているので、旧約聖書の *ahabah* に比較すると、Nygren の主張することを大体首肯せしめるように見える。しかし、それにしても、*agape* と *philia* とが判然と区別されていたのか否か。ヨハネ福音書21章における、復活のイエスとペテロとの間にかわされた問題の個所に出て来るこの二つの語（ただし動詞の形ではあるが）をめぐるの釈義は、それほど簡単に解決されてはいないであろう。(Peshitta を見ると、*agapan* と *philein* とは区別されないで、同一のシリア語に訳されている。Peshitta はギリシャ語からの訳でありながら、したがって、*agapan* と *philein* の区別を知りながら、そのように訳したことを一度は考慮に入れるべきであろう。イエスも弟子もギリシャ語やラテン語で会話をしなかった。)

それ故に、Nygren の *agape* 論はルター神学のそれとして読むべきであ

訳語によって起る新約聖書用語の屈折について(5)

って、それを基本として聖書を解すべきではない。agape への正しい理解は、旧約聖書における *ahabah* から始まり、新約聖書において完全な形で展開されたと見るべきである。その後、Vulg.においてカトリク的な偏向が見られ、今日でもヨーロッパ語の多くの訳の中にその影響がいろいろの程度において見られる。そこに、新約聖書用語が時代時代において、各国語に訳されるとき、さまざまな訳語の意味の屈折が起きた、といわざるを得ない。

(1971年1月26日 稿)

Taking all these actual circumstances into account, this paper treats of the conditions to check and accomplish unification, of its significance, and it also sets forth the significance of the original development of casework adopting counselling and psychotherapy as a special form, each of which has individually been developing these days.

Formation of Rationalized "Enterprise" (Betrieb) in Caritas and Ascetic Protestantism in Max Weber's Sociology of Religion

Jiro MATSUI

In *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie* and *Wirtschaft und Gesellschaft*, Max Weber frequently refers to *caritas*. Weber's interest is in the relationship of the formation of rationalized "enterprise", or lack of it, in *caritas* to religions.

In this paper discussion is focussed on the relationship of rationalized "enterprise" in *caritas* in modern Europe to ascetic Protestantism.

Studies in the Refraction Found in New Testament Translations

Kunio KATO

By New Testament translations, I mean on the one hand, before all, the Peshitta, a Syriac version, and on the other hand, the Vulgate, the Luther's Bible, the Authorized Version, La Jérusalem Bible, etc. *Ahabah*, Old Testament Hebrew equivalent for Septuagint Greek *agape*, *philia*, and *eros*, means love of man for man, love of man for a thing, love of man for God, and love of God for man. When the New Testament books were written in Greek, *agape* and *philia* were used, but *eros* not at all. When the Peshitta was written in Syriac, generally speaking, the Syriac word which was equivalent for the Hebrew *ahabah*, was translated into Latin, not necessarily but mostly, *agape* was translated into *charitas*, which gave much influence on such modern French versions as La Jérusalem Bible and Crampon's La Sainte Bible.